

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年6月15日現在

機関番号：11302

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21500549

研究課題名（和文） 教員養成のための体育実技科目における運動促発能力の養成に関する例証的研究

研究課題名（英文） Case study on cultivation of analytic ability for other people's kinesthetic genesis through Physical Education practical subject in teacher training course

研究代表者 木下 英俊 (KINOSHITA HIDETOSHI)

宮城教育大学・教育学部・教授

研究者番号：60241650

研究成果の概要（和文）：本研究では、教員養成課程の専門科目である体育実技科目の授業に、学生が将来教師として体育の授業で児童、生徒の運動の発生を促す、運動の促発能力を養成するプログラムを作成、実践し、発生論的運動学の立場から考察することを通して、その意義を例証的に明らかにしようとした。促発能力の中の観察、交信能力の基礎養成に成功した事例、失敗した事例を収集し、その分析を行った。その結果、実技の授業を通して学生が自分の動きかたに気づき、他者の動きかたと出会うことを前提とした、観察や交信能力の基礎養成が、学習者に応じた運動発生のための指導能力の基盤となることが示唆された。

研究成果の概要（英文）：In this study, a program, which cultivates analytic ability of students in teacher training course for other people's kinesthetic genesis, was framed and put into Physical Education practical subject. And the process of this program was considered from viewpoint of genetic movement theory (Bewegungslehre des Sports). Successful and failed examples were analyzed. As a result, the fundamental cultivation of observation and dialog ability formed the basis of teaching competent in Physical Education to make students' kinesthetic genesis of movement. Awareness of one's own kinesthetic consciousness and encounter with other people's kinesthetic consciousness were very important as the precondition.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2010年度	600,000	180,000	780,000
2011年度	200,000	60,000	260,000
年度			
年度			
総計	1,800,000	540,000	2,340,000

研究分野：総合領域

科研費の分科・細目：健康・スポーツ科学、身体教育学

キーワード：運動指導論、運動促発能力、教員養成、スポーツ運動学、体育実技

1. 研究開始当初の背景

わが国のスポーツ運動学の研究領域では、体育・スポーツ運動の学習、指導において、外形的な（外から見た）運動の習得や習熟のプロセスのみでなく、学習者の、「私の動き

かた」としての「運動感覚」（フッサールの「キネステーゼ」、金子の「動感」と同義）能力の発生様態の解明とともに、指導者が学習者の運動形態の発生を促すことのできる動感運動促発能力の重要性が指摘されるよ

うになっていた。そして指導者の動感促発能力の領域、構造体系や分析論が論じられるようになるとともに、教員養成における促発能力養成の重要性が指摘されているところであった。これらを背景に、教員養成課程の学生が将来の体育・スポーツ運動の指導力を養うために、体育実技科目の授業に指導者としての動感促発能力を養成する教育内容を実際に組み込み、そのプロセスを発生論的スポーツ運動学の立場から例証的に研究することを着想するに至った。

2. 研究の目的

本研究の目的は、教員養成課程における専門科目としての体育実技科目の授業に、将来学生が指導者として児童、生徒の動感運動の発生や洗練化を促す、運動の促発能力を養成するプログラムを作成、実践し、それが体育・スポーツの指導力を養ううえでどのような意義を持つのかを、発生論的スポーツ運動学の立場から検討し、例証的に明らかにすることにある。

3. 研究の方法

(1)2009年度は体育実技科目の現状と問題点を把握するとともに、文献研究を中心にして、本研究で養成すべき促発能力を選び、有機的な配列、構成を検討する。それに基づいて研究代表者が担当する体育実技（器械運動）の授業の中で促発能力を養成するための具体的なプログラム活動を構成する。この活動を予備的な実践として実技授業の一部に組み込み、その結果を技の実施や授業風景のビデオ撮影、学生の記述内容やインタビュー等から検討し、促発能力養成プログラム作成に必要な例証の収集にあたる。

(2)2010年度は前年度の研究をもとに、養成すべき促発能力を再検討したうえで、促発能力養成のための活動プログラムを作成する。それを研究代表者が担当する体育実技（器械運動）の授業で実践して、学生の記述内容やビデオ映像の分析を通して発生論的スポーツ運動学の視点から例証となる事例を収集するとともに、プログラムの成果と問題点を検証する。

(3)2011年度には2009、2010年度の研究を踏まえ、促発能力養成の活動プログラムを微調整して再度実践し、そのプロセスを例証分析する。2010、2011年度の実践の研究結果からプログラムの最終的な成果と問題点について取りまとめるとともに、教員養成における体育・スポーツの指導力を養成するうえでの、促発能力養成の意義について、本研究の成果より課題、位置づけを明らかにする。

4. 研究成果

(1)促発能力養成プログラム作成のための準備過程

文献研究より、指導者自らの運動感覚を分析する「創発分析能力」を基盤としたうえで、促発能力としての「観察」、「交信」能力を養成し、「代行」、「処方」能力の養成に結びつけることが構想された。

次に2009年度前期の「器械運動」（鉄棒運動）の授業で、学生の技能レベル向上に主眼を置いた教員主導の活動と、学生同士で指導し合う活動を順次的に行い、技の実施のビデオ撮影とアンケート調査を実施した。その結果、技能レベル（創発達成能力）が高く、創発分析能力も高い学生は、他の学生に適確な動感言語の呈示（アドバイス）を行えるという典型的な例証を得ることができた。一方、技能レベルが高くても他者の学習に無関心な学生、自分の運動の発生に精一杯で他者の学習に目を向ける余裕がない学生等の例証を得ることで、実技授業の現状と問題点が把握された。

これらを踏まえて2009年度後期の「器械運動」（以下すべてマット運動）の授業で、学生同士で技の実施を観察させて、お互いの運動について話し合い、教え合う活動を行い、それらの内容を質問紙に記述させ、撮影したビデオ映像の分析と併せて、動感観察（観て相手の動感を感じ取る）と動感交信（相手の動感を聞き出す）の様相を検討した。その結果、動感観察ができていない者でも、話し合いの場面では動感交信が可能な者と運動の外的経過の特徴に関する内容に終始している者とに分かれた。教え合いでは外的経過の改善に関する内容が多く見られ、動感処方となっている例証を得ることは難しかった。

(2)促発能力養成プログラムの基本的枠組みの設定

上述(1)を踏まえ、学生自身の創発達成および創発分析能力の養成を基盤に、運動促発能力としての動感観察および交信能力の基礎養成を中心に置くことが構想された。そのために、一定期間の技能向上のための練習、学生同士でお互いの運動の観察（自己観察と他者観察）内容の記述、それに基づいた対話を中心とするお互いの動感交信やアドバイス、そしてその内容の記述が、促発能力養成プログラムの活動内容の基本的枠組みとして設定された。代行および処方能力についてはプログラム実施のプロセスの中で、その発生様相を把握することが目指された。

動感観察や動感交信は、本来動感促発分析の最終的なステップである動感処方（指導）の道筋やそれに基づいた段階的な言語呈示などを見据えたうえで行うべきであるとされている。特に動感交信については不用意な

内容を聞くことで学習者の動感を混乱させる場合もあり、何でも聞き出せばいいというものではない。しかし、それを指導経験の乏しい学生に要求するのはかなり困難である。したがって、上述の「動感観察および発信能力の基礎養成」とは、学生たちが自分の動感を持ちだして、他者の運動を観てその動感を少しずつ感じ取ることができる（＝動感観察能力の基礎養成）、そして主として対話によって学生同士の動感を聞き出しそれに共振できる（＝動感発信の基礎養成）ようになっていくことを意味している。プログラムの実施によって学習者の動感に混乱が生じるような場合は、教員がフォローすることとした。

(3) プログラム実施の結果とその検討

2010 年前期の「器械運動」の授業では、受講学生の技の実施をビデオ撮影した後でお互いのビデオ映像を提示し、その映像を媒体としてプログラムの活動を実践した。ここでは、自分の動きかたに気づく能力と発信能力の基礎養成をねらいとした。その結果、動感観察、発信として認められる例証が複数確認された一方で、前年度同様に運動の外的特徴のやりとりで終始する場合も散見された。この活動では、映像から動きの感じを生き生きと呼び起こせる「動感想起」の能力が、動感観察や発信のために必要であり、それが発揮されないと外的運動経過の特徴の指摘のレベルにとどまってしまうことが推察された。

同年後期の「器械運動」では、ペアやグループでお互いの運動を観察し、補助し合う機会を多く取り入れて授業を進め、プログラム活動を実施した。その結果、前期と比較して、動感発信やそれに基づくアドバイスが多くみられた。また、授業の進行とともに、お互いの動く感じに気づく機会が増えたという趣旨の感想が多かった。このことから、授業の進行の中でお互いの動く感じに気づく、あるいは「出会う」ことの積み重ねが、動感観察や発信能力を養成する前提となることが示唆された。

2011 年度の「器械運動」の授業では最初、なるべく固定した 3、4 人のグループでお互いの運動を見たり、補助したり、動きかたに関する話しやアドバイスをしてほしい旨を受講学生に伝え、そのような機会を多く取り入れて授業を進め、プログラム活動を実施した。授業のプロセスの中で、グループ内でお互いの動く感じに「出会い」が成立している場合には、自分の動きに気づき、相手の動く感じに共感してアドバイスする、などのように動感観察、発信に基づく処方としての言語呈示を行うという、促発能力の基礎養成の例証を多く収集することができた。その一方で器械運動が苦手と感じている者や、自分の技

に専ら関心がある者は、運動のどこを観ればよいかわからない、あるいは消極的な対話になってしまうなど、他者の動感観察や発信に困難を感じている事例がみられた。

(4) 促発養成プログラムの成果と問題点

以上のことから、本研究で設定し、実施したプログラムを通して、動感観察と発信の基礎を養成できた例証を一定程度確認したとすることができる。また動感観察や発信の基礎養成のために、プログラムの最初である一定期間の技能向上のための練習において、学生自身の創発達成能力や創発分析能力を養成するだけでなく、同時にペアやグループでの活動の中で、技能差はあったとしても、お互いの「動感出会い」が成立することの重要性を、本研究における実践によってより明確にすることができた。

プログラム実施の中で、動感観察や発信に基づく処方としての言語呈示（アドバイス）の事例も見られたが、動感促発における発信の次のプロセスである「代行」能力（目標となる動きかたの構成）に関する資料収集に不十分な点があり、今後の課題となった。

一方、プログラム実施の中で動感観察や発信がうまく機能しない場合として、学生が実技を苦手としていて創発達成能力や創発分析能力が充実していない事例、目標となる動きかたがペアやグループの中で共通理解されていない事例、観察や発信の際に自分や相手の動感を生き生きと呼び起こす「動感想起能力」が充実、または機能せず運動経過の外的特徴のみに関心が向いてしまう事例等が見出された。

また、本研究の実践は、中等教育教員養成課程保健体育専攻の専門科目である「器械運動」と、初等教育教員養成課程の教科専門科目である「体育」（実技）の「器械運動」のそれぞれで行われた（いずれも半期 15 回）。前者を受講した学生は比較的スキルレベルが高く、目標となる動きかたに対する共通理解は得やすかった反面、初級レベルの学習者の動感観察、発信を行う機会は少なかった。後者を受講した学生はスキルレベル比較的低く、またばらつきがあり、さまざまなレベルの動感観察、発信を行う機会に恵まれた反面、目標となる動きかたの共通理解が得にくかったと考えられる。

(5) 本研究の成果の位置づけ、インパクト等

本研究は、発生論的スポーツ運動学の重要な課題のひとつである、教員養成における動感促発能力養成に関して、観察、発信能力の養成プログラムを設定、実践し例証分析を行ったものであり、促発能力養成の方法論に寄与する研究として位置づけられる。また、本研究における促発能力の基礎養成のプログ

ラムは、研究代表者が担当する実技授業の中で行われたものであり、受講する学生との関係の中でそのプロセスを研究の対象にした、いわゆる「経験分析」としての研究である。個人的な経験分析の中に他者にも妥当する類的な普遍性の解明に向けた基礎研究として位置づけられるといえる。

国内学会で論文投稿を行った、指導者の創発分析能力に基づく促発分析の意義に関しては、国内の複数の研究者と共同して、「発生論的運動学に基づく運動指導」と題して内容を再構成した研究として、ドイツでの国際学会に研究発表を申込み、それが採択され、学会での口頭発表（3人が分担して発表）に結びついたことから、本研究の成果は国内外に一定のインパクトを与えたと考える。

(6) 今後の展望

本研究の成果より、教員養成における体育実技科目での運動促発能力の養成は、学習者の動く感じの世界に共振しながら、それに応じた新しい運動形態の発生を促すという視点に基づいた運動指導の能力として、マネジメント的指導能力と併せた指導能力の育成に寄与する可能性を示唆することができた。

今後はまず第一に代行、処方能力の養成を含めた、運動促発能力養成の実践に関する研究を深めることが重要である。また運動促発能力も含めた、教員養成における体育・スポーツ運動のトータルとしての指導力養成の観点からは、専門科目としての体育実技科目のカリキュラム上の位置づけ、内容や方法について、他の授業科目（体育科教育法、教材研究、スポーツ運動学など）とも有機的に関連させながら、検討を深めることが重要であると考える。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計4件）

①木下英俊、Analyse zum kinaesthetischen Bewusstsein des Turnlehres bei der Rolle ruckwaerts am Boden、Schriften der Deutschen Vereinigung fuer Sportwissenschaft、査読無、216巻、2011、27-32

②木下英俊、本学「器械運動」の授業の現状と課題—動感創発と促発の観点から—、宮城教育大学保健体育論集、7号、2011、45-50

③木下英俊、コツ身体知に関する指導者自身の動感創発分析の意義について—マット運動伸膝後転の事例から—、スポーツ運動学研究、査読有、23号、2011、15-24

④木下英俊、マット運動における後転グループの技の習得に関する一考察、宮城教育大学紀要、査読無、44巻、2010、125-135

URL：<http://ci.nii.ac.jp/naid/110007543448>

〔学会発表〕（計3件）

①木下英俊、マット運動における倒立前転の技の概念規定と実施の仕方について、日本体育学会第62回大会、2011年9月27日、鹿屋体育大学（鹿児島県）

②佐藤徹、中村剛、木下英俊、Lehren von Geraetturnen aufgrund der aesthesiologischen Bewegungslehre、ドイツスポーツ科学連盟器械運動部門学会大会、2010年9月27日、ケルンスポーツ大学（ドイツ）

③木下英俊、運動指導における指導者のコツ意識に関する事例的一考察、第23回日本スポーツ運動学会大会、2010年3月7日、神戸親和女子大学（兵庫県）

6. 研究組織

(1) 研究代表者

木下 英俊 (KINOSHITA HIDETOSHI)

宮城教育大学・教育学部・教授

研究者番号：60241650